

NCPR

新生児蘇生法

News Letter

CONTENTS

- 1 ごあいさつ
- 3 Pコース指導法特別フォローアップコース報告
- 4 EITワーキンググループの取り組みについて
- 8 「事務局からのお知らせ」 これからの修了認定更新について
- 10 名誉委員特別寄稿

ごあいさつ

細野 茂春

日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法委員会委員長
自治医科大学附属さいたま医療センター 小児科・周産期科 教授



2022年度は新型コロナウイルス感染症の重症化率低下の兆しがみえてきたものの、救急医療体制は依然逼迫した状態が続きました。出生数の低下が見られますが感染症対策は気が抜けず、救急車の依頼件数は高止まりし受け入れ調整に時間がかかっており新生児搬送にも支障をきたしている地域もあるようです。また発熱を伴わない新型コロナウイルス感染症が増えたため入院時、検査が行われず、母児同室後、母親が新型コロナウイルス感染症と診断され濃厚接触または発熱して児のみ新生児搬送された例も散見されました。そういった状況下においてもNCPR講習会は2020年度の落ち込みから回復傾向にありSコースに関しては新型コロナウイルス感染症流行直前の2019年度の開催数1,616件には及ばないものの2015年のSコース開始以降2番目の1,034件になりました。講習会運営にたずさわって頂いている皆様方と受講者の方々に深謝いたします。学会主催のIコース、Fコースもトレーニングサイト関係者のご尽力で継続して開催を行うことができます。しっかりと感染症対策を行って開催した結果、この3年間、クラスターを出すことなく講習会を行うことができました。

新型コロナウイルス感染症は2023年5月8日に5類に移行することが正式に決まりました。これに伴ってe

ラーニングによる更新を認める特別措置を12月末の有効期限の方までで終了することが新生児蘇生法委員会の協議により決定しました。今後はABJ認定をお持ちの方は更新にはSコース受講が必須に戻りますのでご承知おきください。詳細はホームページでお知らせいたします。また、今号ではEITワーキンググループによるインストラクターの育成に関する取り組みをご紹介します。大きく変わる点として、実績の条件を満たした経験豊富なインストラクターは専用のeラーニングを学習いただくことで更新できるようになります。詳しくはP4からをご覧ください。

救急救命士、救急隊員、消防吏員などを対象とした病院前新生児蘇生法講習会（以下Pコース）は新型コロナウイルス感染症流行下の2020年5月に始まりましたが、救急隊員はじめ現場の方々から高い評価をいただき受講希望者が増加し開催件数が追いついていないのが現状です。Pコースは多くのインストラクターが知らない病院前救急活動の特殊性があり、Pコース開催を躊躇しているインストラクターが多いことから、Pコース指導法特別フォローアップコースを東京と大阪で開催いたしました。今後各地のトレーニングサイトでの開催も考えています。特別フォローアップコースに関しては別項でご報告いたします。

最後になりますが、新生児蘇生法委員会が昨年7月より新体制になりましたのでご紹介いたします。2007年立ち上げよりNCPR事業にご尽力いただいた田村正徳先生、茨聡先生、久保実先生、正岡直樹先生が日本周産期・新生児医学会の評議員を退任されました。先生方には今後もお力添えをお願いすべく新生児蘇生法委員会に新たに名誉委員の役職を設置いたしました。副委員長には名古屋大学の小谷友美先生が就任され、産科領域委員7名、小児科領域委員8名の体制で新しい委員に加わっていただきました(図1)。また以下の3つの小委員会もこれを機に新委員長に荒堀仁美先生、諫山哲哉先生にご就任いただきました。

制度改革推進小委員会

(委員長：(継続) 草川功先生)

トレーニングサイト運営小委員会

(委員長：(新) 荒堀仁美先生)

ILCOR担当小委員会

(委員長：(新) 諫山哲哉先生)

その他、以下3つのワーキンググループには継続してそれぞれの課題に重点的に取り組んでいただけます。

海外支援ワーキンググループ

病院前新生児蘇生法ワーキンググループ

NCPR EIT ワーキンググループ

今後とも皆様におかれましては新生児蘇生法普及事業をご活用頂くとともに、ご支援を賜れば幸いです。

図1 新生児蘇生法委員会新体制

委員長	細野 茂春	自治医科大学附属さいたま医療センター
副委員長	小谷 友美	名古屋大学医学部附属病院
委員 A 領域	石川 源	宮城県立こども病院
委員 A 領域	榎本 紀美子	神奈川県立こども医療センター
委員 A 領域	亀井 良政	埼玉医科大学病院
委員 A 領域	田中 博明	三重大学医学部附属病院
委員 A 領域	田丸 俊輔	埼玉医科大学病院
委員 A 領域	富田 芙弥	東北大学病院
委員 A 領域	平川 英司	鹿児島市立病院
委員 B 領域	荒堀 仁美	大阪大学医学部附属病院
委員 B 領域	諫山 哲哉	国立成育医療研究センター
委員 B 領域	北野 裕之	石川県立中央病院
委員 B 領域	草川 功	加藤産婦人科医院
委員 B 領域	嶋岡 鋼	国際医療福祉大学塩谷病院
委員 B 領域	杉浦 崇浩	豊橋市民病院
委員 B 領域	安田 真之	香川大学医学部附属病院
委員 B 領域	和田 雅樹	新潟県庁
名誉委員	茨 聡	鹿児島市立病院
名誉委員	久保 実	石川県立総合看護専門学校
名誉委員	田村 正徳	佐久大学PCAN大学院コース 埼玉医科大学総合医療センター
名誉委員	正岡 直樹	東京女子医科大学八千代医療センター

2つのトレーニングサイトが以下の施設に移動しましたのでご紹介いたします。



①千葉トレーニングサイト

千葉大学医学部附属病院 **大曾根 義輝 先生**

この度、千葉トレーニングサイトをお引き受けすることになりました。千葉県内には医師、看護師、助産師、救急隊員、医学生など多くの認定を受けられた方々がおられます。皆様の需要に千葉県内のインストラクター皆で、オール千葉でお答えしたいと存じます。何かご要望があれば、お気軽にお声かけください。どうぞよろしく願いたします。



②東京Cトレーニングサイト

国立成育医療研究センター **諫山 哲哉 先生**

この度、東京Cトレーニングサイトをお引き受けすることになりました。院内外の登録インストラクターの医師・看護師・助産師で共同して、多職種で連携して講習会を行っていきたくと考えております。できる限り、地域の皆様のご要望にお応えしていきたくと考えておりますので、何かありましたら、お気軽にお声かけください。どうぞよろしく願いたします。



病院前新生児蘇生法(Pコース)指導法 特別フォローアップコース報告

細野 茂春 病院前新生児蘇生法ワーキンググループ長

新生児蘇生法委員会では2020年5月に救急隊の方を対象とした病院前新生児蘇生法(以下Pコース)を新設いたしました。救急の現場は新生児でも、成人または小児のアルゴリズムに準じて蘇生が行なわれているのが我が国の現状です。これは、どのプロトコルを使用して蘇生を行うかは主に地域のメディカルコントロール(MC)協議会が決定しているからです。一方、以前から現場の救急隊員からはNCPRIについて学びたいという声があり、JRC(日本蘇生協議会)と話し合いを重ねた結果、NCPRIに基づいたPコース新設の承諾をいただきました。しかしPコース開始直後に新型コロナウイルス感染症の流行が起こり、救急隊の活動件数の増加と感染対策上講習会受講が制限されていたことからPコースの開催数も低迷したまま3年が過ぎてしまいました。

しかし今後Pコース需要が高まることが予想され、多くのインストラクターにPコースを開催していただく必要があることから、新生児蘇生法委員会の病院前新生児蘇生法ワーキンググループ主催でPコースの指導法についての特別フォローアップコースを東京(2月5日)と大阪(2月19日)で開催いたしました。両日とも7ブースと大規模に開催され、救急救命士を含む救急隊員23名の方々にご協力いただき合計75名のインストラクターが全国から参加くださいました。

一般的な周産期医療従事者は救急隊の指揮系統を含めた活動内容を知る機会がほとんどないため、救急隊のバックグラウンドを知ること(MC協議会で策定されたルールに従って限られた資器材で活動していること・救急隊が使用している一次救命処置(BLS)アルゴリズムや救急救命士標準テキストでの記載内容とNCPRIとの違い)や救急隊の方への指導のポイントを中心にプログラムを組みました。また、実習ではNCPRI受講歴のある救急隊員に受講者役をお願いすると共に、直接救急現場での活動の実際についてご助言いただきました。このことはPコースにおける知識の共有に非常に役立ったと感じました。

この特別フォローアップコースは要望があれば今後全国のトレーニングサイトでの開催も検討してまいります。また、救急隊の方々からはインストラクターとして自分たちでPコースを運営したいとの意見を多くいただいたので2025年には制度改正を行いPコース専任のインストラクターを養成していく予定です。

最後になりますがこのコース運営にご協力いただきました救急隊の方々に深謝いたします。



NCPR認定者の皆様へ NCPR EIT (Education, Implementation, and Teams) ワーキンググループの取り組みについて

杉浦 崇浩

豊橋市民病院 小児科（新生児）
NCPR EIT ワーキンググループ長

NCPR事業は2007年に前委員長の田村正徳先生が中心となり、『すべての分娩に新生児の蘇生を開始することのできる要員が少なくともひとり、専任で新生児の担当者として立ち会う』ことを目標にその産声を上げました。その後十数年の短期間に急速に現在の形にまで発展してきました。その変遷を辿ると資格授与のためのA・Bコースとそれに平行したIコースの開設に始まり、知識・技術の維持・向上と資格更新を兼ねたSコース、Fコースの追加とIコースの大幅改定、2020年にはPコースの開設と様々なニーズに応えるために各コースを開設・改定してきました。これに平行してeラーニングの開発と改定、トレーニングサイトの開設・拡充等も行われています。

みなさんを含めたNCPRの認定者数は2023年3月現在で約6万9,000人に及びます。これらの認定者が現場で本当に赤ちゃんを救うことが出来るようにNCPRの知識・技術・態度を持ち、またそれを維持するためには講習会を開催するNCPRインストラクターの存在は非常に重要です。このインストラクターはI・Jを合わせると約4,700人になりますが、中には講習会開催の実績もなく、指導者として満たすべき知識・手技・態度に不足のあるインストラクターも散見されます。

そこで、NCPR教育システムの弱点・欠点を抽出

し、改善するためにEITワーキンググループが設立されました。EITとはEducation, Implementation, and Teamsの略で、国際蘇生連絡委員会（ILCOR）が提唱する国際コンセンサス（CoSTR2010）の中で初めてこの名で新たな章が創設され、日本語では『教育・普及のための方策』と訳されています。具体的にはエビデンスを現場に反映し、実効性を高めるための教育手法・方策に加え、医療体制・システム、倫理的問題の整備の必要性などが述べられています。

EITワーキンググループはこれまでNCPR事業で幾つかのコンテンツ作成に携わっていただいた甘利昭一郎先生（国立成育医療研究センター）、荒堀仁美先生（大阪大学大学院医学研究科）、大橋敦先生（関西医科大学）、嶋岡鋼先生（国際医療福祉大学塩谷病院）に蘇生教育の普及に深く携わられている日本蘇生協議会編集委員の西山知佳先生（京都大学大学院医学研究科クリティカルケア看護学分野）を加えたメンバーで構成され、この巨大なNCPR教育システムの弱点・欠点を抽出し、その改善について議論・検討してきました。

私たちEITワーキンググループでは認定者のみなさんにとって本当に臨床現場で生きるNCPR、そして赤ちゃんとご家族のために、健やかな誕生に役立つNCPRを現実化するために、より質の高い

インストラクターの育成こそがその近道であるとの結論に至りました。

そのために下記の3つの改変を行うこととしました。

1. 新しいインストラクターコースの整備*1

これからインストラクターになろうと思うみなさんにとって、どんなインストラクターが望ましいのか、なかなかイメージが湧かないのではないかと思います。NCPRでは望ましい理想のインストラクター像を挙げ、25項目のコンピテンシー（理想のインストラクターが備えている行動の要素・行動目標）を明確に記述しています。さらにインストラクターコースではこの中でも特に重要な12項目を抽出し、評価表とレーダーチャート式のフィードバックシートを作成し、使用しています。今回の改定では、インストラクターコースにおける講義を12のコンピテンシーに沿った内容とし、望ましいインストラクター像をより深く理解することができるようになりました。また指導者として深く理解しておくべきアルゴリズムの知識についてはeラーニングで事前学習する形となり、より充実したインストラクションの実習時間をインストラクターコース内で確保することができました（図1・2）。

図1 改定版インストラクターコースのタイムスケジュール

0:05-0:15	インストラクター養成コースにおける基本的概念 (10分)
0:15-0:35	インストラクターとしての望ましい態度 (20分)
0:35-1:00	手技トレーニングの指導 (25分)
1:00-2:15	グループ実習 (75分)
2:15-2:50	シナリオトレーニングの指導(35分)
2:50-5:15	グループ実習 (145分)
5:15-	まとめ：共有したい思い (15分)

図2 改訂版インストラクターコース 講義例

評価項目3：すべての受講者に対して公正である

さまざまな職種 さまざまな立場の方が受講します。

あなたならどうします？

2. 新しいインストラクター対象フォローアップコースの整備*2

従来のFコースでは、参加するインストラクターによって経験や力量に大きなばらつきがあり、中には講習会開催実績が少ないため、インストラクションに自信を持ってないインストラクターも少なくありませんでした。質の高いNCPRの裾野を広げるべく、今後のFコースでは講習会開催経験の少ないインストラクターの支援に主眼を置き、より実践的に講習会開催につなげることができるようなコースとしました。具体的には講習会開催時、特にシナリオ実習において経験回数の少ないインス

トクターのみなさんが困るであろう問題点・トラブルを抽出し、それぞれのシチュエーションに対する具体的な対応策を取り上げています。参加者のみなさんが一人ずつインストラクター役として実習を行い、その体験を通して皆でディスカッションし、最後に様々な対応例を共有するといったものです（図3）。このFコースを受講することで、経験が少なく、自信のないインストラクターのみなさんが、講習会開催時のトラブルに対する具体的な対応策を身に付け、その結果講習会開催のハードルが下がり、より適切なインストラクションが実践できることが期待されます。

また経験が豊富で、NCPRの普及に積極的なインストラクターの方々、専用のeラーニングのコンテンツを履修することで、Fコースに参加することなく資格が更新できるようになります（P8～参照）。

図3 Fコース教材例



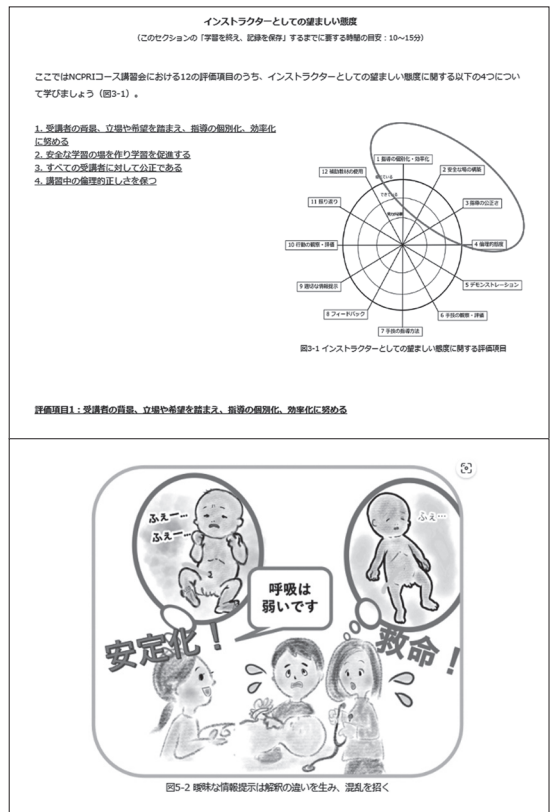
3. インストラクター向けeラーニングの整備^{*3}

Iコース、Fコースの改定に併せ、以下の新規eラーニングが開設されました（図4）。

- ①インストラクターコース受講予定者用eラーニング
- ②インストラクター継続学習用eラーニング（インストラクター更新用eラーニング含む）

①のインストラクターコース受講予定者用eラーニングは、まさにNCPRのインストラクターになるための最初の入口です。この入口がしっかりしているかどうかで、NCPRインストラクターの質が保たれるかどうかが決まると言っても過言ではあ

図4 インストラクター継続学習用eラーニング 例



りません。そのためIコース受講予定者用eラーニングはNCPRのアルゴリズム等の知識はもちろん、NCPRのインストラクターとして共有すべきビジョンや、望まれる態度面についてもしっかり学び、学習後にテストで確認することができます。またIコースに合格することは決してゴールではなく、むしろインストラクターとしてのスタート地点に立ったに過ぎません。さらに各自講習会を開催し、経験を積み、インストラクターとしての腕を磨くことも大切ですが、自分自身のインストラクションを自分で振り返る事こそ、インストラクターには必要不可欠な態度と言えます。そんな時のガイドとなり得るのが②のインストラクター継続学習用eラーニングになります。インストラクターのみなさんは是非このeラーニングを積極的にご活用ください。また経験豊かなインストラクターに対しては資格更新用テストを含むコンテンツも新たに追加されています。

最後に

みなさんの『手』が、みなさんの目の前の『赤ちゃん』を助けます。日本全国でしっかりとした知識・技術・態度を習得したインストラクターが、講習会を開催し、みなさんの『蘇生技術の質の維持』をサポートしてくれると思います。コロナ禍が過ぎた今、みなさんがeラーニングではなく、シミュレーション実習のできる講習会に参加されることを全国各地のインストラクターが待っています。是非一緒に赤ちゃんの予後の改善を目指しましょう。

改定検討メンバー（50音順・敬称略）

* 1 インストラクターコース改定検討チーム

榎本 紀美子	神奈川県立こども医療センター
大久保 千絵理	独立行政法人国立病院機構佐賀病院
小澤 悠里	杏林大学医学部付属病院
木下 大介	京都第一赤十字病院
嶋岡 鋼	国際医療福祉大学塩谷病院
山本 正仁	長浜赤十字病院

* 2 フォローアップコース改定検討チーム

荒堀 仁美	大阪大学大学院医学系研究科
杉浦 崇浩	豊橋市民病院
野原 孝子	前 大阪大学医学部附属病院
橋本 侑美	名古屋女子大学
水本 洋	財団法人田附興風会北野病院
安田 真之	香川大学医学部附属病院

* 3 インストラクター対象eラーニングチーム

甘利 昭一郎	国立成育医療研究センター
大橋 敦	関西医科大学
菅島 加奈子	国立成育医療研究センター
中張 惇子	自治医科大学附属さいたま医療センター
西山 知佳	京都大学大学院医学研究科
野島 奈明	社会医療法人愛仁会高槻病院
山本 淳子	前 関西医科大学附属病院

事務局からのお知らせ

これからの修了認定更新について

A・B・J※認定をお持ちの皆様

eラーニングでの更新を認める特別措置は2023年12月31日までの有効期限の方で終了となります。それ以降の有効期限の方は、更新に際しては、従来のSコース受講を必修とする制度に戻ります。更新1年前になりましたら登録のご住所宛にご案内通知が届きますので、有効期限までにSコースを受講し更新手続きをお願いいたします。（※J認定の方は、募集対象となっているFコースの受講でも更新可能です）



Sコースの開催については、ご自身の施設や近隣のインストラクターへご要望ください。

HPでは、開催場所・開催日・一般公募の有無で検索できます。公募をしていない場合でも、定員に空きがあれば受講できる場合もございますので、更新のために受講したい旨を連絡先担当者までお伝えのうえ受講が可能かお問合せください。

インストラクター認定（I認定）をお持ちの皆様

【Sコースの開催のお願い】

上記の通り、今後Sコースの受講が更新のためには必修となります。インストラクターの皆様は、自施設、近隣施設の認定者に向けて広くSコースの門戸を広げ開催をしていただきますようお願いいたします。

【Iインストラクターの更新に関する変更点】

従来、Iインストラクターの更新には、以下の条件が必要でした。

- ①【更新のための履修】 認定期間3年間のうちに、トレーニングサイトで開催されるフォローアップコース（以下Fコース）を1回以上受講すること
- ②【インストラクター実績】 認定期間3年間のうちに、3回以上のインストラクター実績（もしくは開催責任者実績）があること

新生児蘇生法委員会で検討した結果、2023年5月より、このIインストラクターの更新要件のうち①「更新のための履修」を変更することが決定いたしました。

条件を満たしたIインストラクターは、更新のための履修として「Fコース受講」もしくは「インストラクター専用eラーニングの履修」で更新可能となります。②のインストラクター実績については変更ありません。

eラーニングで更新が可能となる | インストラクター

以下の a・b いずれかの条件を満たした方が対象となります。

- a. 1 インストラクター取得から主インストラクター実績が累積30回以上あること
- b. 2 回目以降の更新で、3 年の認定期間のうち最初の 2 年間で、主インストラクター実績回数が10回以上あること

例…現在の認定期間2021年1月1日～2024年12月31日の場合、

2021年1月～2023年12月末までの実績回数が10回以上あればbの対象となります。

※初回更新時はFコース受講が必要です。

※abいずれかの条件を満たしていても、eラーニングではなくFコース受講での更新も可能です。

数多くのインストラクター活動をしていただくことで、更新のための履修の選択肢が増えます。ご自身の施設・地域におけるNCPR講習会開催へのモチベーションにつなげていただければ幸いです。

ご自身のインストラクター実績数はHPよりご確認くださいませ。

【インストラクター対象のeラーニングについて ※またはJの認定をお持ちの方が受講可能です】

インストラクター対象のeラーニングが開講しました。全てのインストラクターが継続学習として学んでいただけます。是非、今後のインストラクター活動へ役立てて下さい。

新生児蘇生法 名誉委員 特別寄稿

これからのNCPR事業に期待する事

田村 正徳 埼玉医科大学総合医療センター名誉教授

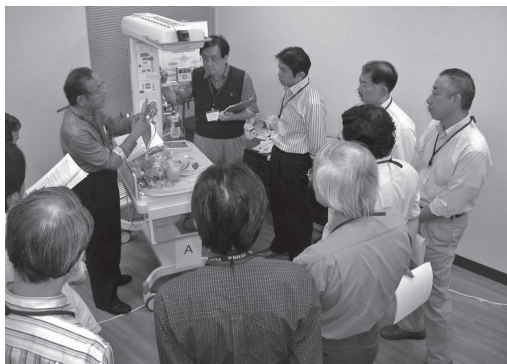


NCPR立ち上げの恩人達

長野県の全出生児を対象とした調査結果では、重症仮死が約1%あり、そのほとんどが常勤小児科医がいない施設で発生していました。僕が2002年に埼玉医科大学総合医療センターに赴任して同様の状況に悩んでいた時に佐橋剛先生が「米国のNRPを日本で取り入れることを考えたらどうか。」と助言して、米国でNRP事業が普及した結果、極低出生体重児の生後1分のApgar Scoreが生後5分に有意に改善する率が全てのレベルの施設で改善したが、特に小児科医師数や施設規模の小さな施設での改善効果が顕著であったという論文^{文献1}を教えてくださいました。

そこでNRPの幹部のSuzan Niermeyer教授、John Kattwinkel教授、Myra Wyckoff教授等に働き掛けてNRPの日本への紹介や国際蘇生連絡委員会（ILCOR）の新生児部会への参加を実現し2007年7月から日本周産期・新生児医学会の公認事業としてNCPR事業を開始する事が出来ました。北米の様に小児科分野に留まらず、日本ではNCPR事業が産科・助産

【第一回インストラクター養成講習会】



シナリオ演習風景

師分野でも広く受け入れられるようになったのは、当時日本産婦人科医会会長の坂元正一先生と日本未熟児新生児学会（現：日本成育医学会）理事長の戸苅創先生のおかげです。また、日本では約半数の分娩が常勤小児科医のいない診療所や助産所で取り扱われていることからProvider courseを新生児蘇生法「専門」コースと「一次」コースの二種類に設定した事も産科・助産師・看護師の受講促進に貢献したと思います。何よりも忘れてはならないのは中川正弘様や栗田真貴様をはじめとする歴代学会事務局の皆様のご尽力です。

今後期待する事

CoSTR2010以降は、Debriefingを活用した講習会やe-learning方式が採用され、細野茂春委員長の指揮下に救急救命士・救急隊員を対象とした病院前新生児蘇生法コースや認定者対象継続学習のスキルアップコース等も始まり、欧米のILCOR加盟国に負けない質の高い講習会事業が展開され、東南アジア支援も企画されているのは素晴らしい事です。「全てのお産に新生児の初期蘇生が出来るスタッフが少なくとも1人、新生児の責任者として立ち会う」という本事業の最終目標が実現する日も近いでしょう。NCPR事業の開始とともに新生児仮死による早期新生児死亡率が減少していることは喜ばしいことですが、仮死による医療ケア児の増加が危惧されます。我々の全国調査でもNICU長期入院児の14%が重症仮死児でした^{文献2}。今後はこうした事例を分析して蘇生の手技や手順の改良に取り組む事で更に世界をリードする事を期待しています。

文献1. Patel et al. J Perinatol 22:386, 2002

2. 厚労科研平成25年度成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「重症の慢性疾患児の在宅での療養・療育環境の充実に関する研究：研究代表者田村正徳」

NCPRと私

久保 実

石川県立総合看護専門学校
(元石川県立中央病院小児科)



私と新生児蘇生法（NCPR）との出会いは田村正徳先生からお声をかけていただいたことで始まりました。2007年7月にNCPR事業が始まりますが、米国のNRPの資格を持っている方々と共にその創設メンバーに加えられたことは私にとってとても名誉なことと感謝いたしております。ちなみに、インストラクター No.の1は田村正徳先生、3が茨聡先生、8が正岡直樹先生、そして私が4です。とても諸先生方のように全体をリードするような実力はなかったので、私の役割は地方でNCPRの普及を図ることと理解し、努めてまいりました。

当初は自前で人形を購入し、病院の器材を利用して少人数の講習会を行っていました。大学や能登地区などにも出かけて行っていました。幸運だったのは、2008年から県医師会の理事となり、周産期関連事業担当となったことです。周産期医療研修会事業にNCPRを追加する予算を獲得し、NCPR講習会を2008年から石川県からの委託事業とし組み込むことが出来ました。これにより受講者が受講料の負担をすることがなくなりました。また、受講者募集などの事務作業を医師会事務局で行ってもらえるため、講習会の開催が容易になりました。講習会は年6～7回程度開催し、2022年度末までに計111回開催しました（図）。受講者も述べ1700人を超えています。さらに石川トレーニングサイトとして新生児蘇生法委員会が主催するIコースを9回、Fコースを6回開催しています。2017年に病院を定年で退職した後はトレーニングサイト長を北野裕之先生と交代しましたが、現在もディレクターとして講習会を開催しています。まさに私のライフワークの一つとなりました。石川県の新生児医療の底上げに少し貢献できたのかなと自負しております。

NCPRの思い出をいくつか挙げるとすると、まずは全国の同志と知り合えたことです。蘇生法委員会のメンバー、さらに石川トレーニングサイトでのIコース、Fコース開催時に事務局の皆様や助っ人若手？の先生方との交流があります。大きな刺激と元気をいただきました。また、熱海でのインストラクターの研修会も良い思い出です。今はコロナ禍で合宿などしにくいですが、温泉でお酒を酌み交わしながら熱く語り合うノミネーション、私は好きです。長和俊先生に講習会の特別講師として招かれた際には、美酒や肴とともに、紅葉真っ盛りの北海道大学のイチョウ並木の美しさが印象的でした。

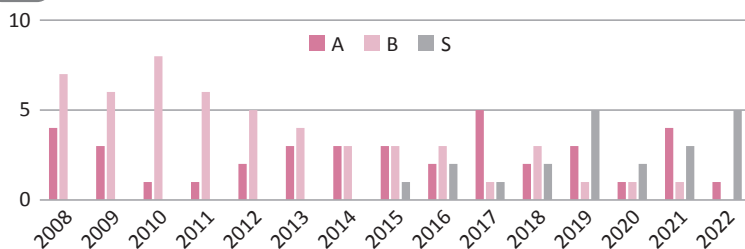
名誉会員としてもう少しこの事業に参画させていただけることに感謝しつつ、老害を撒き散らさないように気を付けますので、よろしく願いたします。

【2011年4月24日開催のインストラクター養成講習会】



助っ人として和田雅樹先生、島袋林秀先生、杉浦崇浩先生が来てくれました。

図 NCPR開催数



赤ちゃんはどこで生まれても、 高いレベルの蘇生を受ける権利がある!!

正岡 直樹

東京女子医科大学八千代医療センター
母体胎児科・婦人科



この度、新生児蘇生法名誉委員にご推薦いただきました、身に余る光栄であり、他の名誉委員を見た時に私で良いのかと自問した程ですが、細野茂春委員長をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

昨年、日本周産期・新生児医学会の功労会員となりました。驚くことに評議員期間は28年間にも及んでいました。単に歳をとったということだけですが、振り返ってみますとその間のprofessional careerとして重要と考えられることは、岩下光利委員長のもとで周産期専門医制度の立ち上げに携わったこと、板橋家頭夫委員長のもとで周産期診療ワークブックの編集に携わったことなどありますが、やはり田村正徳委員長のもとで新生児蘇生法委員会の誕生から現在まで一貫してNCPRの教育、普及に従事できたことだと感じています。私は2007年、東京プリンスホテルで開かれた第1回のインストラクターコースを受講しました。広い会場で、多くの参加者があり熱気にあふれた講習会でした。当時、日本大学医学部附属板橋病院に勤務しており、そこには日本有数の新生児科があり、院内の分娩で異常が発生した場合は速やかに対応していただくことができ、なんの心配もありませんでしたが、一方、院外の当直業務を一人で担当する時には新生児蘇生に漠然とした不安があったことも事実でした。講義は田村正徳先生が自ら担当され、実技含め、まさに目から鱗が落ちるがごとし。これはお産に立ち会うもの全てが習熟すべきものと痛感しました。そこでいただいた認定番号はI-07-00008で、おそらく産科医師としては一番若い番号をいただき、今でも私の自慢です。

その後、新生児蘇生法委員会に入れていただき、

日本各地の講習会への参加、3回のNCPR改訂作業への参加、また「新生児蘇生法インストラクターマニュアル第3版」の改訂ワーキンググループの主担当、さらに私の現勤務先を千葉トレーニングサイトにしていただき、自施設から多くのインストラクターが誕生したこと、全国から多数のIコース受講者をお迎えできたことなど良い思い出になっています。

「ヒトにとって分娩は一生の中で、最初に死の危険にさらされる瞬間である：dangerous journey」。これは私が敬愛する前日本産婦人科医会会長寺尾俊彦先生の言葉ですが、私たちはこれをmiserable journeyにしてはならない責務を負っています。これに加えて表題にした「赤ちゃんはどこで生まれても、高いレベルの蘇生を受ける権利がある!!」は私がNCPRの講義をする際に、最初に強調しているmottoです。今後のNCPR事業の益々の普及、発展を祈念するとともに、なんらかの形で関わらせていただければ幸いです。

【2016年7月30日開催のフォローアップコース】



講義風景